

護山真也「プラジュニャーカラグプタの〈知覚＝存在〉説に関する一資料」、
『信州大学人文科学論集』第1号（通巻48号）、2014の訂正表

2015/03/03 作成

頁 Page	誤 Reads	正 Should Read
54.6	普遍は認識対象では	普遍という認識対象は
54.8	(人間の) 目的だから	有用だから
54.13	追及される	必要とされる
55.7	(ディグナーガの言明)	(ダルマキールティの言明)
55.20	とならないのだろうか。	と考えないのか。
57.20-22	《知覚経験 (upalambha) によって知られるものはすべて究極的なもの (pāramārthika) に他ならない。諸存在者の究極的な存在性 (sattā pāramārthikī) とは知覚経験に他ならない。》	《知覚によって特徴づけられるもの、それこそが究極的なものである。「(あるものの) 存在性とは (それが) 知覚されることに他ならない」と (ダルマキールティも) 述べる通り、(upalambha こそが) 諸事物の究極的な (存在性) である。》
57.25	知られるのだから	知らしめられるのだから
58.15	その場合でも、(対象の) 非存在 (asattva) に対して	それ (=ウサギの角) に関しても、非存在があるときに
58.21-22	あるいは、「知覚されていない」という (反省的な) 概念知 (nopalambha iti vikalpa) なのか?	あるいは、「私は (これを) 知覚していない」という (反省的な) 概念知 (nopalambhe iti vikalpa) なのか?
59.25	認識対象	その認識対象
59.31	もし (そのような理解を含め) 知覚一般が認識されるのであれば、	単なる経験が拠り所となるのならば、
60.1	知を想定する (想定)	〈想定〉により知を想定すること
60.5-6	認められないことではないだろうか?	認めないだろうか?
60.13	そうだとすれば、〈現に知覚しないままで知覚すること〉が必ずある	そうだとすれば、知覚されていなくても知覚はあること
60.14	それ (=現に知覚していないこと)	それ (=現に知覚されていないこと)
62.1-2	これは (ミーマーンサー学派が言う) 〈想定〉ではないのか。そうだとすれば、	このような〈想定〉がどうしてあるのか。「同様に (〈想定〉による)」とすれば、

62.5-6	相対的な観点から	他に相待して
62.6-7	そして、その（相互に）関連した本性は、	しかし、それが限定されているのは、
62.17	の想起に基づく	が明瞭だから
62.31-63.1	非知覚とは「知覚されない」という概念知に他ならないと言うならば、それも違う。「知覚されない」という概念知は、	非知覚とは「私は（これを）知覚していない」という概念知に他ならないと言うならば、それも違う。「私は（これを）知覚していない」という概念知は、
62, fn. 29	知覚を（間接的に）立証する	非知覚を（間接的に）立証する
63.12	[PVABh 214.26-215.15:]	[PVABh 214.26-215.4:]
63.15	それは別様にはならない。別の人間	それは別様には認識されない。（それを推理する）別の人間
63.23	（推理者自身によっても将来）	（推理者自身によっても将来、知覚されるものとして）
63.25	その（推理の）時点で	その（推理の）時点で（知覚されるものとして）
63.26	知覚されているもの）なるのか。	知覚されているもの）理解されるのか。
63.27-28	それ（＝究極的な存在性）	それ（＝推理対象）
64.1-2	存在者（＝不可視ではあるが存在するもの）に対する非知覚があるとすればよい。どうして（それが）非存在であろうか。	存在していても、（それが）知覚されないことはあろう。どうして（知覚されないからといって、それが）非存在であろうか。
64.9	〈現に見られていること〉	（推理の時に）〈現に見られていること〉
64.12	（だとすればその対象は、推理の）後でだけ存在することになる。	（だとすれば、それは）後時にのみ（＝獲得の時点でだけ）存在しよう。
64.17-18	〈現に知覚されるもの〉として理解することは知覚されるが、別様に（理解されれば）別様になる。	（獲得の時点で）〈現に知覚されるもの〉として理解されるから、（そう）知覚されるが、そうでない場合には（＝推理の時点では）、別様になる（＝知覚されないものになる）。
65.26-66.1	[PVABh 215] 【反論】 それならば、別の認識対象（meyāntara、＝普遍）はどうなるのか。	[PVABh 215.4-15] 【反論】 それならば、どうして別の認識対象（meyāntara、＝普遍）があるのか。
66.3-4-5	付託されているのだから、（それは）究極的な対象（paramārtha）ではない。	付託されているからであり、究極的な立場からではない。

66.11	(実在の) 多様性を理解しないままに、(普遍を含めて一律に)「実在」と表現している。	(知覚対象と概念的対象との) 相違を理解しないまま、(普遍を) 実在として活動している。
66.18-19	仮にそう理解されるのであれば、それは認識手段が重なっているだけのことである。	(二つの本性が)理解されるのであれば、それは二種の認識手段をもつ。
66.29-67.2	《(認識者毎に) 相違するもの (= 普遍) は概念的に構想されたものであるから、それ (= 相違するもの = 普遍) はまさしく究極的なものではない。しかしながら、(行為を発動することで) 実際に手にされるはずの実在という (普遍) は、究極的なもの (paramārtha) と異なる。》	《他ならぬその (認識対象の) 区別は概念的に構想されたものであるから、究極的なものではない。一方、〈実在〉という (未来に) 獲得されるべきものは究極的なものと別ではない。》
69.29	prayojanatvāt.	saprayojanatvāt.* *saprayojanatvāt Ms : prayojanatvāt S
70.27	jñāyate	jñāpyate
71.5	kim vā nopalambha iti vikalpaḥ	kiṃ vā nopalabhe iti vikalpaḥ
71.20	buddhe	buddheḥ
71.21	anupalambhamāno	anupalabhyamāno* *anupalabhyamāno Ms : anupalambhamāno S
72.2	svāpekṣaṃ	svāpekṣayā
72.5	upalabhyamānatāsmaraṇād	upalabhyamānatāprasādād
72.9	atha nopalambha iti vikalpa evānupalambhaḥ, tad api na, nopalambha iti vikalpo	atha nopalabhe iti vikalpa evānupalambhaḥ, tad api na, nopalabhe iti vikalpo
72.19	pramāṇābhāve	pramāṇābhāve
72.24	pratītir	pratīter
72, fn. 12	svāpekṣaṃ bhāva em. (cf. rang la ltos nas dngos po yin D 200a2) : svāpekṣam abhāve Ms, S	svāpekṣayā bhāva MsE (cf. rang la ltos nas dngos po yin D 200a2) : svāpekṣam abhāve Ms, S
72, fn. 13	-smaraṇād em. (cf. dran pa nyid las Y D 102b2) : -prasādād Ms, S; rig bya nyid las D 200a3.	[delete]

72, fn. 14	nopalambha iti <i>em.</i> : nopalambhe iti Ms, S.	[delete]
72, fn. 19	pratītir upalabdhā <i>em.</i> (<i>cf.</i> rtogs pa ni dmigs pa yin D 200b2) : pratīter upala[bdha]mā Ms; pratīter upalabdham S *[] = insertion in the marginal space.	[delete]
72, fn. 15	tad pai na, nopalambha iti <i>em.</i> : tad api na nopalambhe iti Ms; tad api nānopalambhe iti S	tad api na nopalabhe iti Ms : tad api nānopalabhe iti S
73.3	paramārthaḥ	paramārthataḥ* *paramārthataḥ Ms : paramārthaḥ S
73.8	eva tat	etat* *etat M _{SE} : eva tat Ms, S